

III. 研究ノート

やんば天明泥流ミュージアム設置の経過とその役割

古澤 勝幸

はじめに

「やんば天明泥流ミュージアム」(以下、本館)は「八ッ場あがつま湖」を臨む長野原町林地区に令和3(2021)年4月3日に開館した。

当館は、八ッ場ダム建設に伴い26年にわたって実施された約100万m³に及ぶ埋蔵文化財発掘調査の出土資料及びデータを保存管理するとともに、天明3(1783)年の浅間山噴火により発生した天明泥流災害を中心に、縄文時代からの八ッ場地区の歴史を展示する博物館である。

当館が保存管理する発掘調査による出土遺物は、八ッ場地区の近世の農村や農民の生活を伝え、それを奪った天明泥流、さらには縄文時代から中世までを伝える膨大なものである。また、これらの発掘調査には多くの地元の人たちが作業員として携わったことも他の災害展示を行っている博物館には見られないことである。併設する長野原町立第一小学校旧校舎の移築には卒業生が実行委員会をつくり保存移築に取り組んだ。まさに、地域の人々が歩んだ歴史を伝える博物館である。

そこで、本稿では、本館設置の経過及び災害をテーマにしているものの、それに留まらない本館の果たすべき役割を考えてみたいと思う。

1. ダム建設と博物館建設の経緯

昭和27(1952)年に計画された八ッ場ダムは、その後様々な曲面を乗り越え令和2(2020)年に完成した。この間昭和55(1980)年に群馬県が提示した『八ッ場ダム建設に伴う地域住民の生活再建案』では「水没地域の動植物及び文化財等を調査し、記録保存の措置を行う」としており、さらに平成2(1990)年に国と県が策定した『地域居住計画』では「史跡・文化財・民俗に関する資料や民具等を収集し、これらを展示する水没文化財センターを整備する」ことが示された。同年12月には、

長野原町林地区から同センターの林地区建設に関する強い要望があり、国と県は「林地区に整備する」ことを回答した。

長野原町ではダム建設に伴い古文書、民俗文化財、石造物などの調査を実施してきた。また、埋蔵文化財発掘調査は平成6(1994)年にスタートした。

平成22(2010)年の政権交代により、ダム建設は一旦中止され、再開後も制度改正により、「ダム周辺整備事業」での博物館建設は対象外となった。その後、国・県・町・下流都県で設置主体、建設費用、完成後の管理運営にかかる協議が行われ、平成28(2016)年に「利根川・荒川水源地域対策基金事業」の一環として町営の施設として建設することが決まった。なお、発掘調査で出土した遺物収納箱約17,000箱相当も、すべて町が県から無償譲渡を受け、本館で収蔵、展示、調査研究に活かすことになった。

建設・展示には群馬県が全面的にバックアップすることになり、町と県が平成29(2017)年9月に『長野原町水没文化財保存センター基本構想書』をとりまとめた。また、建設地は、道の駅「八ッ場ふるさと館」の西約600m、延床面積は約1500m²で平成32年度中のオープンを目指すことになった。11月には町が「(仮称)町営水没文化財保存センター整備に係るワーキンググループ」(以下、WG)を設置し、群馬県県土整備部特定ダム対策課と町ダム対策課が事務局を務め、6名を委員として施設や展示について議論を進めた。なお、筆者はワーキンググループのリーダーとして会議のとりまとめ役を務めてきた。

2. 開館に至る検討と準備の経緯

本館は八ッ場ダム建設に伴う生活再建事業の一環として設置されたため、通常の博物館建設に比べると、極めて短時間で用地の決定から設計、建設、展示、資料輸送を実施してきた。WGでの検討の推移、WG作業部会の

設置、資料輸送等、平成 29 年基本構想策定以降の検討準備の経過は以下の通りである。

このほか、長野原町では担当者、担当課による 100 回以上に及ぶ打合せ、グラフィックや解説、模型製作に

おいては令和 2 年度に入ると担当と展示業者である丹青社との日々の協議、建設工事においても月 2 ~ 3 回程度佐田建設、丹青社との打合せを実施してきた。

表 WG の構成メンバー

役職	氏名	WG 発足時の所属・役職
リーダー	古澤勝幸	群馬県教育委員会文化財保護課・課長
グループ員	黒澤照弘	群馬県教育委員会文化財保護課・指導主事
グループ員	築瀬大輔	群馬県立歴史博物館・補佐（学芸係長）
グループ員	藤巻幸男	群馬県埋蔵文化財調査事業団・調査資料部長
オブザーバー	佐藤修二郎	長野原町ダム担当副町長
オブザーバー	富田孝彦	長野原町教育委員会文化財係・補佐

平成 29 年 9 月（仮称）長野原町営水没文化財保存センター基本構想策定

平成 29 年 11 月 14 日 第 1 回 WG 会議（長野原町公民館）

参加者：WG メンバー、事務局

- (1) ワーキンググループ員の紹介
- (2) ワーキンググループ設立趣意書（案）及び規約（案）について
- (3) 基本構想について
 - ・基本構想書で示された建設候補地の内、林地区が最適であること、その場合の土地の造成方法、建物と駐車場の配置などの説明と意見交換
- (4) 今後の進め方について
 - ・ダム関連事業終了の平成 33 年 3 月までに完成させなければならないとして、それまでのスケジュールが示された

平成 30 年 1 月 17 日 第 2 回 WG 会議（群馬県庁）

参加者：WG メンバー、関係者（県建築課、県八ッ場ダム水源地域対策事務所〔以下、対策事務所〕、株式会社福島設計事務所〔以下、福島設計〕、株式会社丹青社〔以下、丹青社〕）、事務局

- (1) 建築設計について
 - ・事前に提示された 4 つの建築プランの中で、2 階を展示室・管理エリア、1 階を収蔵庫とする案を元に設計を練り上げる
 - ・1 階を収蔵庫とする場合、擁壁との間にドライエリアを設ける
 - ・体験学習室、シアターは必要だが面積は今後検討
 - ・非耐火建造物である旧第一小学校とは軒で 6 m、壁で 10 m 以上となる
- (2) 展示設計について
 - ・2 案提案された中で、導入（通史）→天明泥流前（縄

文→江戸時代（天明泥流前）→天明泥流シアター）→天明泥流後→企画展示+旧第一小学校をベースに検討を進める

- ・天明泥流に絞った展示を目指す。普遍性のあるものを中心据える
- ・シアターは学習と臨場感の両面を持つ演出とする

平成 30 年 1 月 29 日 文化庁協議（文化庁）

文化庁：美術学芸課 宇田川滋正文化財調査官

県：文化財保護課、特定ダム対策課、県建築課、対策事務所

町：富田

- (1) 博物館を設置することになった経緯と事業概要、スケジュールを説明
- ・建物の立地、既存施設（旧第一小学校）、2 階を展示室、1 階を収蔵庫とする案を提示
- (2) 立地・平面案・展示案について説明後事前に送付しておいた質疑事項について指導助言
 - ・町の意向を最優先すること、人員配置、企画展開催の有無、資料の貸借の有無等を考慮し施設のスペックやメンテナンスを検討するよう助言を受ける

平成 30 年 3 月 7 日 第 3 回 WG 会議（群馬県庁）

参加者：WG メンバー、関係者（県建築課、対策事務所、福島設計、丹青社）、事務局

- (1) 建築設計について
 - ・2 階エントランス・展示室、1 階収蔵庫の設計プランの動線について意見交換。テーマ展示と企画展示を兼用スペースとする
 - ・旧第一小学校は造成工事のため一旦解体移築、再築の際向きを変え、アプローチを広く、離隔距離を確保できるようにする
 - ・収蔵庫の金庫扉、耐火扉、各エリアの使用部材、設備の仕様確認

(2) 展示設計について

- 江戸時代の人々の暮らしをメインテーマとし、展示構成をA通史展示（長野原の通史）、B映像展示（天明泥流体感シアター）、C基本展示（天明泥流罹災遺跡「くらし絵巻」）、D・Eテーマ展示（江戸時代以外の時代／テーマの展示）、旧第一小学校（校舎の沿革・民俗資料）とする
- シアターのスクリーンについて曲面、4面の提案、日常の生活、8月5日、発掘の状況とのオーバーラップの構成が提案された

※WGで意見交換後、町が曲面スクリーン採用を決定。

平成30年5月11日 独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所との協議（東京文化財研究所）

東京文化財研究所：保存科学研究センター保存環境研究室吉田直人室長

県：文化財保護課、特定ダム対策課、建築課

町：富田

- 保存環境・展示環境からみた平面プランの具体的な指示
- 公立館に求められる授乳室等必要な機能の説明
- 温湿度管理の目安やフィルター（ケミカルフィルターは不要）

平成30年6月14日 第4回WG会議（群馬県庁）

参加者：WGメンバー、関係者（県特定ダム対策課、対策事務所、県建築課、丹青社）、事務局

- (1) 独立行政法人東京文化財研究所との協議結果の報告
- (2) 展示設計
 - ①展示全体構成、②くらし絵巻のシーン設定と構成、③その他コーナーの手法と構成、④映像シアターの構成シナリオ、⑤解説計画

平成30年8月16日 第5回WG会議（群馬県庁）

参加者：WGメンバー、関係者（県特定ダム対策課、対策事務所、丹青社）、事務局

- (1) 展示全体構成の確認
 - 展示ストーリーの確認
 - 平面プラン・ゾーニングの確認
- (2) 各コーナーの構成と手法
 - ①ガイダンス、②くらし絵巻、③天明3年の大噴火
 - ④ふるさとを語り継ぐ、⑤テーマ展示

平成30年9月18日 第6回WG会議（群馬県庁）

参加者：WGメンバー、関係者（県特定ダム対策課、

対策事務所、丹青社）、事務局

(1) 平面プランと展示構成

- (2) ケース形状
- (3) 解説計画
- (4) ハンズオン模型及び複製品を製作する資料

平成30年11月22日 第7回WG会議（群馬県庁）

参加者：WGメンバー、関係者（県特定ダム対策課、対策事務所、丹青社）、事務局

(1) 展示実施設計の検討

- 展示資料に合わせた各ケースのサイズ、LED照明の調整
- グラフィックパネルの内容検討

(2) 屋敷再現模型で製作する屋敷の選定

- WGは完工まで継続。建築、地質分野の監修者、アドバイザーを依頼する
- 解説パネル原稿の作成分担は町が検討

平成31年4月5日 安全祈願祭（起工式）（ミュージアム建設地）

平成31年4月24日 WGに作業部会設置

- WGメンバーの内、解説原稿執筆を担当したり、模型・グラフィックの指導助言をしたりする者で組織。以後令和2年9月の間23回の会議・打合せを実施

令和元年7月5日 第8回WG会議（群馬県庁昭和庁舎）

参加者：WGメンバー、関係者（県特定ダム対策課、対策事務所、丹青社）、事務局

(1) 諸室・コーナー・テーマ名称検討

- (2) 災害を語り継ぐコーナーの展示内容検討
- (3) 模型造形検討・ハンズオンレプリカ制作リスト検討
- (4) 導入展示映像、展示室情報端末のコンテンツ検討
- (5) 展示工事にかかる作業分担
- (6) 展示資料リストの確認・検討

令和元年9月25日 独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所との協議

参加者：東京文化財研究所保存科学研究センター吉田直人室長、間渕研究員

県：文化財保護課、特定ダム対策課、建築課

町：佐藤ダム担当副町長、富田

関係者：福島設計、丹青社

- 経費を抑えつつ保存管理を適切に実施する方法について

て協議

- ・収蔵庫や展示室において、カビが発生しないよう湿度管理を行うこと、特に金属器などを展示するケース内の湿度管理を徹底することについて指導を受ける

令和元年 11 月 7 日 第 9 回WG会議（群馬県庁）

参加者：WG メンバー、関係者（対策事務所、丹青社）

(1) レプリカ、1号屋敷再現模型、村再現模型

(2) グラフィック

- ・コーナー名称と解説情報の整理
- ・ガイダンスパネル項目と構成の決定
- ・奪われた日常項目と構成の決定
- ・災害の記憶項目と構成の決定

(3) 展示ケース

- ・ケース高の決定

(4) 映像コンテンツ

- ・福島民家園、ドローン撮影の報告

(5) 管理運営体制の計画

- ・環境調査・維持管理費・運営体制

令和2年1月 施設名称「長野原町やんば天明泥流ミュージアム」に決定

令和2年4月1日

- ・学芸員（正規職員）1名、会計年度任用職員2名（内、学芸員1名）採用
- ・教育委員会職員に兼務辞令（実務は令和2年12月から）
- ・職員の体制が文化財保護対策室長（学芸員）以下5名



開館告知ポスター

となる

令和2年8月18日 第10回WG会議（やんば天明泥流ミュージアム）

参加者：WG メンバー、関係者（県特定ダム対策課、県建築課、対策事務所、福島設計、丹青社、佐田建設）、事務局

(1) 展示工事・施設確認

- ・施設の確認及び展示工事の進捗状況の確認

(2) グラフィックの最新一括の確認

(3) 映像・情報探索端末の確認

- ・シアター構成台本の確認・試写

- ・ガイダンス展示の映像確認

- ・情報検索端末の構成資料確認

(4) 模型関係

- ・レプリカ・ハギトリの現物確認

(5) 展示造作・展示パート

- ・展示ケース図面確認

令和2年9月23日 資料輸送に係る打合せ（群馬県埋蔵文化財調査センター）

参加者：長野原町教育委員会、群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県埋蔵文化財調査事業団、日本通運、丹青社

令和2年10月5日～11月6日（延べ24日）

- ・群馬県埋蔵文化財調査事業団から資料輸送（第1期）

令和3年11月9日～11月20日（延べ10日）資料展示

令和3年2月15日～2月18日（延べ4日）

- ・群馬県埋蔵文化財調査事業団から資料輸送（第2期）

令和3年2月17日 開館日告知

令和3年2月19日 旧第一小学校資料展示

令和3年2月24日～25日 町職員内覧会

令和3年3月1日～9日 施設熏蒸

令和3年3月22日 報道機関向け内覧会

令和3年3月25日 八ッ場地区住民内覧会

令和3年3月26日～27日 町民内覧会

令和3年4月1日 古澤勝幸が館長に就任、会計年度任用職員1名採用（受付業務担当）

令和3年4月3日 オープン



@Forward Stroke.inc

設置が計画されていたミュージアムショップは開館後準備をすすめ 11 月オープンとなった。また、ボランティア組織は、令和 3 年度内に養成講座を実施した（別項参照）。

3. 当館の展示概要

基本構想書に掲げられた「ふるさとの歴史、自然、文化を未来につなぐ」というコンセプトに基づき、館の特徴を明確にするためには天明泥流を中心として展示すべきとの意見がWGの大勢を占め、博物館は以下の構成で展示を展開することになった。

I. 天明泥流体感シアター

発掘の成果と歴史資料に基づき、実写とCGを組み合わせ、被災前の農民の暮らしと、浅間噴火と天明泥流の状況を大画面で再現する。

II. ガイダンス展示

展示の舞台となった「やんば」の地理と歴史的な背景、発掘調査地点を示す。

III. よみがえる日常

被災建造物から出土した農民の生活用品を「たべる」「ともす」「なおす」「いろどる・いのる」「つくる」のテーマのもとに展示する。そこからは、様々な生業を営み塗り物や陶磁器を用い、人が集う時に使われた組み物の食器を持ち、茶の湯を嗜み、女性はくしで髪を整え化粧や鉄漿をし、祭りや遊びに彩られた農民の生活がよみがえてくる。

IV. 奪われた日常

泥流の断面剥ぎ取りや、泥流で犠牲になったネコの骨、泥流到達直前まで村役人クラスの家に集まっていた人々が、命からがら逃げたことを物語る、途中まで燃えた線香が残る香炉や、火をつけないままの刻みタバコが残されたキセル、慌てて裸足で逃げた人が残した草履や下駄

などを展示する。また、大切な法具を持ち出すこともできないまま泥流から逃げきった生々しい記録が残る、不動院跡から出土した密教法具を展示している。泥流の威力破壊力を示す資料としては被災した農家の建築部材や破壊された硬い鉄製品、およそ 20km も吾妻川を流れ明治 43（1910）年に発見された常林寺の梵鐘を展示している。

V. 伝えられた災害

天明浅間山噴火と天明泥流は関東地方中心に被害や影響が大きく、このため多くの人々が記録に残した。伝えられた記録と、これらの記録から明らかになった被害の全貌を紹介する。また、この災害から人々がどのように復興を果たしたか、今でも行われている被災者を供養し、被害を伝える活動を紹介し、自然災害を克服し自然とともに暮らしてきた私たちの歩みを紹介する。

VI. テーマ展示

ここはテーマに基づいて展示を展開するとともに、企画展示室としても利用する予定の展示室である。開館時は数多くの縄文時代の遺跡が発見され、豊富な出土資料やデータが得られたことから、縄文時代の他地域との交流を中心に縄文から平安時代のやんばの歴史を紹介する。

VII. 長野原町立第一小学校旧校舎

水没地区から移築された長野原町立第一小学校旧校舎の一部を活用し、長野原町出身の浦野匡彦が作った「上毛かるた」や小学校の教材、民俗資料などを展示している。

4. 本館の役割

冒頭でも述べたように、当館は 26 年という長期にわたり多くの人たちの努力によって成し遂げられた発掘調査、そこで得られた貴重な出土資料やデータを保存管理

する博物館である。これらの貴重な資料を確実に次世代に伝えていくことが本館の最大の使命である。そして、これら資料の研究や調査の成果をいかして以下の活動を継続することが本館の役割だと考えている。

(1) まず第一は、天明三年浅間山噴火災害を「天明泥流」を中心で確実に伝えていくことである。泥流発生のメカニズム、災害の状況、その時人々が取った行動、救済や復興について伝えることによって天明泥流という災害があったという歴史を残し、災害への知識、関心を高め、災害に備える意識の醸成を図ることである。

(2) 第二是天明泥流被災前の八ッ場地域の姿を伝えることである。当館が管理している資料は、天明3年8月5日確実に八ッ場地区に存在し、使用されていた家屋や生活・生産道具等である。これらは重い年貢に苦しみ江戸や地方の町場と比べて贅沢品もなく、遊びやゆとりもなかったと思われるがちな近世の山間部のイメージを覆し、農山村の歴史・生活文化・生業の真の姿の理解に繋がるものである。

(3) 第三是発掘調査によって得られた膨大な縄文時代の出土遺物やデータから、縄文時代から近世までの八ッ場の歴史を伝えることである。縄文時代～平安時代の展示はテーマ展示室の限られた面積であるが、発掘調査で得られた豊富な資料を様々な方法で発信し、約1万年前から八ッ場地域に暮らした人たちの生活文化や、関東や信越、北陸、東北地方にまで及ぶ広い範囲の人たちとの交流を解明し伝える役割を担っている。

(4) 第四是八ッ場地区が上毛かるた発祥の地であることや、八ッ場の人々の思いや誇りを伝えていくことである。この地区の人たちは天明泥流で被災した土地の上に新し

い村を再建してきた。その土地が今度はダム建設によって水没するために移転を余儀なくされたのである。私たちは災害や歴史を伝えるだけでなく、ここで暮らした人々の二度にわたる苦難、それを乗り越え、新しいふるさとを築こうとする人たちの思い、やむを得ずふるさとを離れなければならなかつた人たちの思い、誇りを伝えいかなければならない。

おわりに

東日本大震災発生時「想定外」という言葉をよく耳にした。しかし、三陸をはじめ東北地方の太平洋側は過去に何度も津波被害を受け、津波の研究者や歴史災害研究者はおこるべき次の地震、津波災害への警鐘と備えを訴え続けてきた。津波の大災害が「想定外」になってしまったのは、それらの警鐘を住民、行政、企業が真摯に受け止めたり、十分な訓練や備えを行えなかつたりしたことが大きな原因だったと思うが、警鐘を鳴らす側の発信力、発信方法も十分だったのか振り返ることも必要だと考えている。

災害は毎年、日本でも、世界でも必ず発生する。本館に限らず、災害をテーマとする博物館は、自然災害の驚異とともに、自然の恵みについて伝えるを通して、自然と人との関わり方を知り、正しく恐れ、正しく備え、次の想定外を生み出さないようにする使命を担っている。

(ふるさわ かつゆき 長野原町やんば天明泥流ミュージアム 館長)

基本情報

開館時間

9時～16時30分（最終入館16時）

休館日

水曜日（水曜日が祝日の場合はその翌日）、年末年始

入館料

一般 600円（500円） 小学生・中学生 400円（300円）

（）内は 15名以上の団体割引料金

長野原町民および未就学児は無料

障害者手帳などをお持ちの方とその介護者（1名）は半額

交通のご案内

道の駅八ッ場ふるさと館から徒歩10分

JR長野原草津口駅から車で10分

関越自動車道渋川伊香保ICから車で約60分

上信越自動車道碓氷軽井沢ICから車で約75分